

F.A.ルールに込められたジェントリーの思いと

サッカー文化の今日的・教育的価値

大阪支部 船富 公二

1. はじめに

私は、サッカーの歴史に関わって、拙稿「近代スポーツ＝サッカーの誕生の社会的背景」

(1)のなかで、FA や RFU がどのような時代背景のなかで、どんな経過をへながら結成され、当事者たちの「思い」や「願い」が交錯しながら、イングランド国内外へ伝播されたのかを述べた。また、昨年度の研究報告で「サッカー、ラグビーの分離・成立の背景と両組織の発展過程を比較する」(2)のなかで、パブリック・スクールにおける「フットボール・ルールの成文化」の背景や、成文化の意図(目的)をも明らかにした。これを簡単に示すと、

①1534年、宗教改革でヘンリー8世は重商主義の財源確保

・英国絶対王政は、1588年にスペイン無敵艦隊を撃破し、公海上の覇権を獲得する。

・1651年には中継貿易からオランダ人を排除するのに成功し、植民地との交易のイギリス資本による独占体制を築きあげ、18世紀には「商業革命」を達成する。

②ジェントリーは20世紀直前までイングランドの政治・経済・文化を支配してきた

・重商主義路線は財政支出を膨らませ、16世紀後半には修道院から没収した土地の大半を

切り売りする

・土地を購入した官僚や貿易商は、激減した貴族階級を補填するジェントリー階級(階層)を構成する。

・彼らは、文化的ヘゲモニーとしての「紳士道」をつくり、新興ブルジョアジーをもジェントリー階級に取り込むことに成功して、名誉革命以降のイギリス議会の多数派となり、19世紀末まで、イギリス社会の政治・経済をコントロールし続ける。

③パブリック・スクールはジェントリーの「製造工場」へと変貌した

・中世のグラマースクールのなかでも、王侯貴族や金持ち(テーラー、マーチャント)の基金で運営される寄宿制の学校があらわれる。一定数の貧しい少年を無償で入学させることを義務づけられていたが、物価の高騰に伴う経営難から、私費生を多く入学させるようになり、17世紀には貴族やジェントリーの子弟のための学校に変貌する。

・卒業後は植民地の指揮官や高級官僚となるために、パブリック・スクールの生徒には強靱な体と不屈の精神を持ち、公正で統率力・包容力を兼ね備えた人格を養うことが求められた。

・19世紀にはいって、ジェントリーの家柄や土地を入手できなくなった新興ブルジョア

ジーは、子弟をパブリック・スクールに通わせるようになり、空前のパブリック・スクールブームが起こる。

④下級生イジメが横行する学校から、生徒の自治による「クリスチャン・ジェントルマン」を育てる学校へ

・パブリック・スクール内では、慣例的に下級生は上級生(監督生)の身のまわり(靴磨き、部屋の掃除、紅茶の準備等)の世話をすることが決まっていたようで、言いつけを守らぬ者への暴力行為も、将来の支配者になるための訓練の場として、容認されてきた。

・19世紀前半には、パブリック・スクール急増による生徒の質の低下と監督生制度が絡む暴力事件が多発し、ブルジョアジーからスクール改革を求める声が上がります。

・最初に学校改革に取り組んだラグビー校のアーノルド校長は、i)監督生制度を正式に認め、上級生に「クリスチャン・ジェントルマン」としての道徳的模範となることを促し、ii)「団体スポーツ」の有用性に着眼し、荒くれるフットボールを「組織されたスポーツ」に変えるよう、生徒たちに要請した。

以上が主な流れである。

今回の研究報告のテーマの1つ目は、フットボール・ルールに「オフサイド」の禁止条項が付加されたのは、誰の思いや願いを反映したものなのかを明らかにすること。2つ目は、このような歴史経過を経てきた「サッカー文化の今日的・教育的価値」を考察することである。

2. 「校庭のフットボール」の捉え方

中村敏雄氏は「考察を以上のようにすすめてくるとそれは多分に推察も含むものであったが、オフサイド・ルールは、そのもっとも根本に、1点先取を争うという約束があるなかでの競技時間を長くするという目的から考え出されたものであろうと思われてくる。」(3)と、結論づけている。

しかし私は、氏のこのような見解を否定まではしないが、マス・フットボールや空き地のフットボールの長い歴史のなかで、社会状況の変化のなかで、フットボールに対する人々の捉え方や受け止め方も変化したであろうし、校庭のフットボールに至っては、それまでのフットボールの主体が農民であったのに対して「ジェントリーの子弟」が主体であることを考慮しなければならないと、考えるのである。

①マス・フットボールの変化

i) 中世の頃は、宗教的行事の後の「お祭りフットボール」的なもので、野良作業から解放され、「無礼講」が許され、地主からは酒や肴も振る舞われるなど「国のお祭り」行事であった。

その一方で農閑期には作物の植わっていない「空き地」でも、地主の黙認のもと、フットボールが行われていたと思われる。

ii) 工業化(産業革命)の進行で中小地主が没落する一方で大地主への土地の集中、借地農(農業資本)による農業経営が始まり、農地を追われる農民が都市労働者となって村を離れ出す。また、農業資本による「土地の囲い込み」も行われ、「空き地」のフットボールはできなくなってくる。この時期のマス・フットボールは暴徒化し、行政側からの禁止令も出され、地主階級も拒否反応を示すようになる。

iii) 農業収入が中心であった地主の収入も海

外投資や国債の利息、農地の賃料に移り、地主と雇用農民の密接な関係は崩れる。農村人口が減少する一方で、「上」からの禁止令もあり、「フットボール」は廃れるのである。

②校庭のフットボール

18世紀になると、有名パブリック・スクール(9s)では、子どもたちの「フットボール」遊びが運動場や廊下を使ってさかんになる。しかし、「校庭のフットボール」は、ジェントリーの子弟のゲームであり、上流階級(=特権階級)というエリート意識を持ち、将来は「植民地の司令官」や高級官僚、判事などになることを自覚した集団が行うゲームであった。形態としての荒々しさは同じでも「不屈の精神」「強靱な体」を養成するため、将来は「支配者」となるための訓練として、教師、親たちも容認していたのである。

3. パブリック・スクールの質の変化とルネサンス運動

①「聖職者」を育てるために創られた「基金立寄宿制学校」の教育内容

中世のイングランドも「聖務禁止」や「破門」を武器としたローマ法王庁の勢力下であり、経典(難しいラテン語)を説く「聖職者」階級に牛耳られていたのである。パブリック・スクールでも「難しいラテン語」が必修学科であった。

②ローマ文化を学ぶパブリックスクール

以前はルネサンス(運動)を「文芸復興」と訳されていたが、政治・経済・文化に渡るすべての俗社会におけるキリスト教の縛りからの解放運動と、今では捉えられている。

塩野七生氏は著書『ルネサンスとは何であったのか』(4)のなかで、「キリスト教徒の読むものとしては不適格」とされていた「古代のギリシア人やローマ人の著作」を「人文学者たちによって探し出されて陽の目を見るように変わる。……これらを読んだ人々は、使われている平易な語彙と明晰で簡潔で論理的な文章構成に目を見張る。同じラテン語なのに、聖職者の口からでる複雑でもったいぶった中世風のラテン語と、今新たに発見された古代のラテン語では、同じことの表現のしかたでも差異があるのを知ったのです。」と、当時の人々の驚きを表現している。

ローマ法王庁からの独立をはたした「宗教」改革後のパブリック・スクールでも「平易なラテン語」が取り入れられ、古代ローマのキケロ、ユリウス・カエサルらの書物も活用されたと考えられる。

イングランドではルネサンス運動の影響を受けながら、「紳士道」といった独自の文化を育むことになる。

4. 「オフサイド」ルールはジェントリーの「フェア・プレー」精神が付加させた

「紳士道」は16世紀ごろにもはやされた「騎士道」に由来することは、前述の拙稿(1)でも述べたが、小林章夫氏は、「騎士たるものの生き方は、何事に対しても勇気と正直とをもってあたり、思いやりや礼儀正しさを大事にし、特に女性にたいしては格別の配慮を」し、「一朝ことあらば、真っ先に戦場に駆けつけるという義務感(高貴なものに伴う義務、・『ノブレス・オブリージュ』という考え)も重視された。」「こうして、18世紀には」イングランドでは、「……表面的な飾りよりは実質を大事にし、何事にも自然に振る舞う……イギリス

紳士がうまれた。」「彼らはスポーツで身体を鍛え、フェア・プレーの精神をことさら吹聴し」(5)たのであると、述べている。

山本浩氏は、「アマチュア(=「スポーツを愛好するジェントルマン」の意味)は、フェアプレーを何よりも大切にすることでもあった。アマチュアが重視するフェアプレーというのは、競技のルールを守ることだけ……」ではなく、「どんな場合でも相手と対等の立場でゲームをするということであった。」「明らかに有利な立場に立って相手を出し抜くのはフェアプレーがもっとも嫌うことであった。」(6)と、述べている。

このように観てくると、「フットボール」ルールにおける「オフサイド」禁止条項の付加は「ジェントリー階級」の「フェア・プレー」精神がもたらしたと考えられるのではないか。

ちなみに、『ノブレス・オブリージュ』精神の起源もローマ貴族が始まりと言われているのである。

5. サッカー文化の今日的・教育的価値

1863年に設立されたFAというものは、当初は、ジェントリー階級のセクト意識の産物であった。そして、アソシエーション式フットボールが民衆に広まり出すと、「ローマ人式対処法」(大会当日に説明)で、組織の維持・拡大を選択する一方、「私たちだけのフットボールという思い」を「アマチュアイズムの吹聴」によって保とうとした。

彼らエリートの「セクト主義」は今も見え隠れはするものの、特筆すべきは、「『体・知・徳』を兼ね備えた人間に育つ』ことを願ったジェントリーのわが子への「願い」が、このスポーツの「ルール」や「慣習」のなかに、今も色濃く息づいているのである。

しかし、「冠」大会旺盛な今日、「勝敗主義」的傾向が強まり、「サッカーのビデオ判定」問題も浮上してきている。

サッカーの対極的位置にあるのが **WASP** がつくりあげた「アメリカン・フットボール」で、このスポーツは、得点することを最優先にした「勝利至上主義」で貫かれている。

特徴は「適者生存(=弱肉強食は自然の摂理として人間社会にもあてはまる)」説に基づく「能力に応じた仕事」分担が貫徹されていることである。(7)

WASP は世界戦略のために「文化的支配」の道具として、このスポーツ(日本ではベースボールが先行)を世界に向け発信されたのである。

「一億総中流」といわれた我が国も、小泉内閣の「規制緩和」以降、「貧富の格差」が増大し、若者の「非正規労働者」化が進行しているのもこれと無関係ではないように思える。

学校教育においても「特定の分野に秀でた子どもを育てる」ことが当然視され、一人の人格として、「全面発達」の教育が忘れ去られようとしているとき、サッカー文化の今日的、教育的価値は大きいと思うのである。

【参考文献、参考文書】

- (1): たのしい体育・スポーツ 2012.7・8月号「学習ノート」船富公二 (2): 2016 熊本支援東京大会「サッカー分科会研究報告」船富公二 (3): 中村敏雄「オフサイドはなぜ反則か」三省堂選書 (4): 塩野七生「ルネサンスとは何であったか」「ルネサンス著作集1」新潮社 (5): 小林章夫「イギリス紳士のユーモア」講談社現代新書 (6): 山本浩「フットボールの文化史」ちくま新書 (7): たのしい体育・スポーツ 2014.3月号「学習ノート」「アメリカンフットボール」と「フラッグフットボール」 船富公二